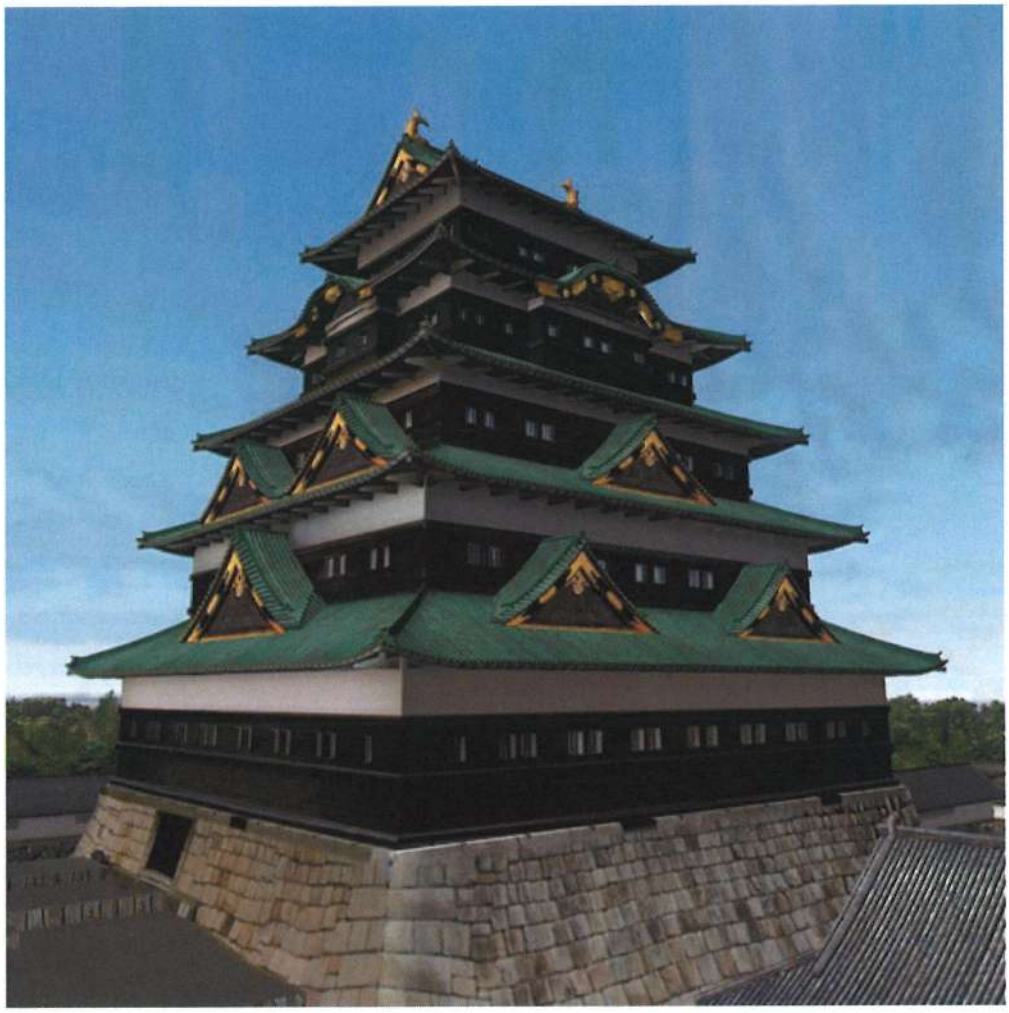
新春初詣会（江戸城御門）

平成28年1月16日（土）



凸版印刷が2009年に作製した江戸城本丸天守閣復元画像

ま ほ ろ ば 会

はじめに

まほろば会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。まほろば会平成28年の行事幕開けは、恒例の「新春初詣会」です。今年は「江戸城の御門」にスポットライトを当ててみました。江戸城は皇居のある吹上と東御苑だけではありません。隅田川との合流点から西へ神田川を遡り、外堀通りに囲まれた半円の範囲がかつて城の外郭だったのです。

外郭から東海道や中山道など「五街道」（ほかに甲州街道・日光街道・奥州街道）が発する交点には「御門」があり、城郭内に入ろうとする敵を見つける場所として「見附」とも呼ばれました。皆さんよくご存知の「赤坂見附や四谷見附」の地名はその名残です。さてその数はというと「六十六城門」とか「三十六御門」などと言われましたが、確定した数字ではありません。

今回の初詣会では、もちろんそのすべてを見学することは出来ませんので、いくつかの御門を勝手に選択させていただきました。

先ずは「皇居正門」から見学してゆきます。島倉千代子さんが「東京だヨおっ母さん」で「あれは、あれは二重橋、記念の写真を撮りましょうね」などと謳っていましたね。あの「二重橋」です。地下鉄の駅名も「二重橋前」などとなっています。「二重橋ってなんのこと？」きちんと答えられる人は何人いますか？おっと失礼しました！「まほろば会」ですので、もちろん皆さんご存知のことと思いますが、その答えは「現場」での説明に譲ることとしましょう。

さて、東御苑の御門を中心に見学したあとは「昼食」とします。昼食の場所は「学士会館」にしました。昭和3年竣工の建物は「国の登録有形文化財」に登録されており、玄関の半円大アーチなど見どころの多い建物です。

昼食後は「築土（つくど）神社」で初詣をします。天文年間には「江戸三社」の一つに数えられた由緒のある神社です。

参拝を済ませてからは、「田安御門」などを見学します。関東大震災や太平洋戦争、バブルなどで街が大きく変貌した東京で、江戸城の歴史や文化の「かけら」を探し、今も生き続ける「江戸」の跡を見つけて歩く小さな旅をぜひお楽しみください。

幹事一同

＜江戸城の城門について＞

江戸城は外郭が螺旋状になっており、その要衝に堅固な城門が配置されています。本丸の外側には二重の堀が巡らされ、時計の盤のように城門は外郭２５、内郭１１、城内に８７門をつくり、城橋は外堀・内堀で３０、それらを通らなければ城に出入りできなかったのです。外郭の門と内郭の門とは、それぞれ連絡していて「小石川御門に田安御門」「虎の御門に（外）桜田御門」「幸橋御門に日比谷御門」「数寄屋橋御門に馬場先御門」「鍛冶橋御門に和田倉御門」「常盤橋御門に大手御門」「神田橋御門に平川御門」「一ツ橋御門に竹橋御門」「半蔵御門に四谷御門・喰違御門・赤坂御門の三御門」などがあり、「３６見附」を置いて守りを固めたのです。また外堀の内側には、参勤交代の大名屋敷が軒を連ねていました。「見附」とは見付ける、すなわち見張りの為の城門のことです。３６御門をどの門を当てるかはいろいろ説があり、３６歌仙などと同じく語呂のよい数字を当てただけで、特に根拠のある数字ではないようです。

江戸城を戦術的にみると、曲輪内部の中仕切門を除くと、曲輪の出入口になっている重要な門は大半が「桝形門」になっています。桝形門は曲輪の出入口に矩形の一画をおき、城外側の「一の門（高麗門）」と城内側の「二の門（櫓門）」の二つの関門を設けるもので、城郭史では最も発達した形式の城門と言われ幕府の権力を示しています。しかし桝形門のうち三方に多聞が巡っているのは下乗門のみで、また桝形に直面する隅櫓が設けられているのは「中雀御門」だけでした。この点は大阪城や名古屋城などの大城郭はもとより、慶長以降の比較的完備した地方城郭にみられる桝形門に比べても、意外に簡素な造りとなっていたのです。

皇居正門（二重橋）

皇居正門鉄橋（二重橋）

皇居正門石橋

皇居の真南にある門で二つのアーチが美しい「正門石橋」を通って正門に行き、その先が「正門鉄橋（てつばし）」になり、そこを通過すると、長和殿のある宮殿東庭になります。天皇誕生日や新年1月2日には長和殿で天皇皇后両陛下と皇族方の参賀があるところです。

皇居正門の元の名前は「西の丸大手御門」でしたが、明治21年(1888年)の 明治宮殿造営の時、この門のすぐ前にあった高麗門を撤去し、名称も 皇居正門と改めました。建造は3代将軍徳川家光の時代と推定されています。

「皇居正門石橋」は江戸時代のときは土で出来た「土橋」でしたが、明治20年12月に現在のようなめがね型をした美しいアーチを描いた石橋になっています。これを二重橋と呼ぶ人がいますが、この石橋は二重橋ではありません。また、この手前の石橋と奥の鉄橋（てつばし）が重なって二重に見えるから二重橋だということでもありません。

「皇居正門石橋」の奥の伏見櫓の手前に見える橋が「皇居正門鉄橋（てつばし）」と言い、当初作られたときは、木の橋を二重に重ねて橋を作ったため「二重橋」と言われています。この辺りの濠は深く（橋の強度のこともあり）、橋の上にもう一つの橋桁を乗せることにより、お堀の深さをカバーしていました。ただし、現在の鉄橋は昭和21年(1964年)に架け替えられたもので、橋桁は二重ではありません。

坂下御門

現在の坂下御門

明治初めの坂下御門

坂下御門は両陛下の通用門であり、宮内庁職員の出入口として使用されています。西の丸御殿の坂下にあることで坂下御門と名付けられました。坂下「枡形門」は、明治宮殿を造営する際に物資搬入など車の通行に考慮して取り除き、渡櫓門のみ「位置を九十度移動して」置かれています。また明治6年(1873年)、後方の蓮池巽三重櫓に連なる箪笥多聞に貯蔵した砲弾の爆発炎上で焼失し、再建されることはありませんでした。

文久2年(1862年)1月15日、坂下御門前に屋敷を構える「老中安藤対馬守信正」が坂下御門にさしかかると、水戸浪士ら尊王攘夷派6名の襲撃を受けました。桜田門外の変を2年前に経験した幕府の警戒は極度に厳重で、信正は軽傷で襲撃者6名はその場で切り倒されました。

「安藤信正は外国に対して屈辱的な条約を結んだ。これは国家の名誉を傷つけ、国の将来を危うくするものである。皇女和宮のご降嫁を願いながら、叡慮を安んじ、攘夷を実行しようとする意図がみえない。事ここに至っては、もはや我々は傍観するに忍びず、よって今日、この挙に出ずるものである」と斬奸状に記されています。この「坂下門外の変」は、五年後の幕府倒壊に向けた幕政反対の国民世論を反映したものであったのです。

内桜田御門（桔梗門）

現在の内桜田御門

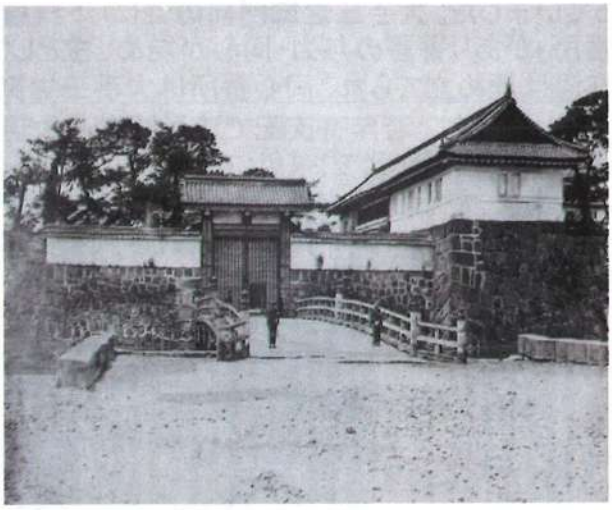
明治初めの内桜田御門

皇居の桜田御門はかつて「外桜田御門」、桔梗門は「内桜田御門」と呼ばれました。古地名の荏原郡桜田郷が名前の由来といいます。桔梗門の名は室町期、太田道灌時代の瓦にあった桔梗紋が由来といいます。現在の桔梗門の鬼瓦にも桔梗紋が刻まれています。

「内桜田御門」は「大手御門」、現在は皇居正門となった「西の丸大手御門」とともに「御三番所」の一つです。かつては幕府要職の登城や大名の下馬門だったのです。現在の桔梗門は皇居参観者や新年と天皇誕生日の一般参賀者の退出門になっています。濠に映る「桜田(巽)二重櫓」が昔日を髣髴とさせます。

大手御門

現在の大手御門



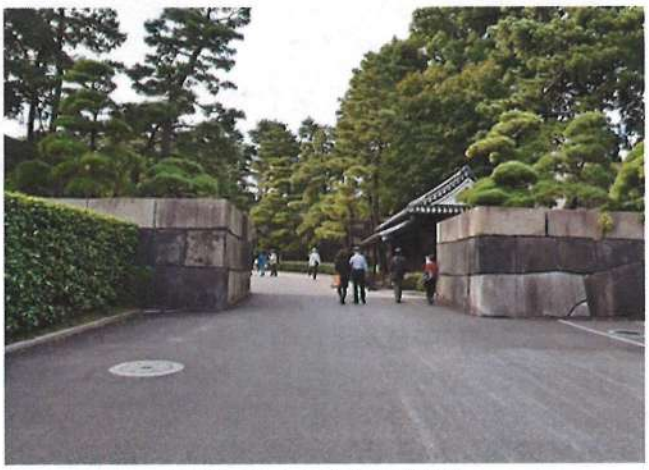
明治初めの大手御門

大手御門は江戸城の正門で、城郭に備える搦手門（半蔵門）に相対する追手門（大手門）です。慶長12年（1607年）近世城郭の名築城家で知られる藤堂高虎によって築かれ、三百諸侯が威儀を正して登城する門となりました。高虎の築城は石垣を高く積み上げる事と濠の設計に特徴があり、同じ築城名人で石垣の反りを重視する加藤清正と対比されます。家康は高虎の城郭建築の才と忠誠を高く評価し外様大名でありながら譜代大名格として重用したのでした。

その後、1620年(元和6年)の江戸城修復で、伊達政宗等によって現在のような桝形(ますがた)様式の城門になったと謂われています。枡形様式とは2つの門からなり、第一の門(高麗門)を通ると枡形の空地があり、右折すると第二の門(渡櫓門)となる城郭門です。この門から三百諸侯が威儀を正して登城して、大手下乗門(大手三之御門)、中之御門、書院門（中雀御門）を通って本丸玄関前に至ったのです。

明暦の大火(1657年)で消失し、再建されましたが太平洋戦争の戦火で消失して1967年(昭和42年)に復元されました。鉄砲30、弓10などの武具により譜代10万石以上の大名が大手御門の警備を勤めたと謂います。

大手三之御門



現在の大手三之御門

明治初めの大手三之御門

大手御門から駕籠で入城した大名は、この「大手三之御門」で降ろされ検問を受けることから、「下乗門」と呼ばれています。この門を駕籠に乗ったまま通れるのは、尾張・紀伊・水戸の御三家のみで、田安・清水・一ツ橋の御三卿は実質の大名ではないため「平川門」から登城する決まりになっていました。大手三之御門前の濠に「下乗橋」が架かり、現在の休憩所売店前のところに「同心番所」があり警護の与力・同心が詰め、主として登城する大名の供の監視にあたっていました。現在濠は埋め立てられ、同心番所は大手三之御門内に移築されています。

「百人番所」は、若年寄支配で江戸城内最大規模の鉄砲百人組（伊賀組・甲賀組・根来組・二十五騎組）の4組が交代で警備していた詰所で、各組とも与力20人、同心100人が配置され、鉄砲25、弓25を備え、昼夜交代で同心が常時100人詰めていたことで百人番所と呼ばれていました。「同心」とは、幕府の諸奉行・所司代・城代・大番頭などの配下に属し、与力の下にあって、庶務・警備の勤務をおこなう下級役人の総称です。

江戸時代の「大手三之御門（下乗門）」（想像図）

中之御門

現在の中之御門

明治初めの中之御門

慶長12年（1607年）藤堂高虎の縄張（設計）で、江戸城大手六門（中雀御門・中之御門・三之御門・大手御門・内桜田御門・西ノ丸大手御門）の中で唯一枡形形式を取らず、多聞塀の中間を切って開けた上に櫓を渡したのが「中之門」です。現在の石積は万治元年（1658年）熊本藩細川綱利が再構築したもので、元禄16年（1703年）地震で倒壊した石垣を鳥取藩主池田吉泰が修復しています。

中之御門の石垣は、江戸城の中でも最大級35t前後の巨石で丁寧に加工された隙間のない「切込みはぎ・布積み」の技法で積まれています。この登城路や天守台の石垣など主要な箇所は、西国大名から献上された「瀬戸内海沿岸産の白御影石」が使われています。平成19年3月に完成した「中之御門石垣の解体修復工事」で、築石同士を連結する銅製の「契り」や築石の据付に使用した銅製、鉄製の「敷金」、さらに築石を連結補強した「大鎹」などの珍しい遺物が出土しました。

江戸時代、大手御門から入城した大名は先ほどの「大手三之御門」を通り、この「中之御門」前の広場に出ます。上記の通り、「中之御門」は枡形ではなく一重の門ですが、地盤の高低差を生かした天然の要害だったのです。中之御門を入るとすぐ右手に「大番所」。左に進んで「岩岐（がんぎ：石段）」を上った先には鈍く光を放つ「中雀御門」。門をくぐったその奥に「江戸城本丸」があったのです。

中雀御門（書院御門）

現在の中雀御門

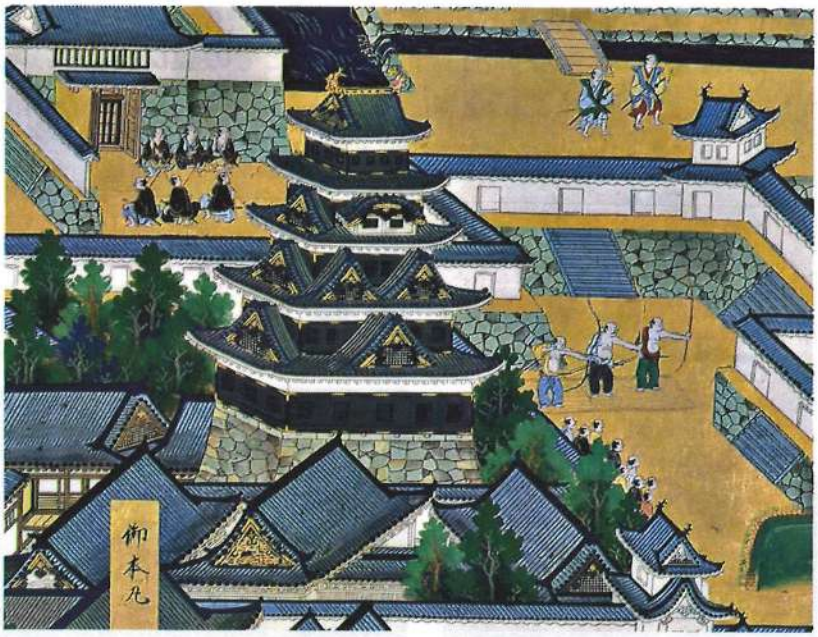
江戸末期の中雀御門

この「中雀御門」は、書院御門または玄関前門とも呼ばれていた最後の関門です。中之御門に入り大番所前を左に進むと、重厚な石垣に囲まれた坂道があります。かつては、この坂は岩岐（石段）で、写真の右が本丸入口の「中雀御門（冠木門）」、左が「新門（あたらしもん）」、左の櫓が書院出櫓（重箱櫓）、右が御書院二重櫓です。「中雀御門」とは、扉に真鍮の化粧金具を取り付けた鍮石門（ちゅうじゃくもん）の由来によります。また四神思想に基づき、本丸の南にあるので南の守護神である「朱雀」から名付けたとの説もあります。徳川御三家といえどもこの門前で駕籠を降り徒歩で玄関に向かいました。

この門の警護は、御書院番の与力10騎、同心20名が鉄砲25・弓25を備えていました。渡櫓門を通過した右手に御書院番与力番所がありました。この門は、文久3年（1863年）11月の火災で本丸御殿が焼けた時に類焼し、石垣の表面が焼け焦げた痕が見えます。元は三代将軍家光が修復した天守台の石で、明暦の大火後新しい天守台が築かれる際に撤去されてこちらに移築されました。中雀御門を抜けると本丸御殿の玄関です。

江戸城天守(閣)

江戸城の天守(閣)は、慶長12年(1607年)家康、元和9年(1622年)秀忠、寛永15年(1637年)家光と3回建築されています。特に三代将軍家光の代に江戸幕府の権威を象徴するわが国最大の「寛永天守(閣)」が完成しました。その天守は地上から高さ58mにあり、天守台の礎石は44m四方高さ18mで、天守の上に金色の鯱をいただく外観五層、内部六階の威容を誇っていました。壁面は白漆喰よりも防火に優れた黒い錆止めを塗布した銅版を用いていました。



三代将軍家光の代の「寛永天守」

天守台

四代将軍家綱の時代、明暦3年(1657年)1月の「明暦の大火(振袖火事)」で城下の多くが焼失、延焼した本丸御殿、天守閣も火災旋風で焼失しました。翌年、天守を再建すべく加賀藩主前田綱紀の手伝普請によって、瀬戸内海の天領小豆島や犬島産の花崗岩(御影石)の礎石で天守台を築きました。再建された天守台礎石の高さはこれまでの7間から5間半と3mほど低くなっています。現在の天守台に見える花崗岩の焼跡は、文久3年(1863年)本丸御殿焼失時のものですが、明暦の大火で焼跡の残る天守礎石(伊豆石)は移設した「中雀御門」で見ることができます。

しかし、家綱の後見人で叔父にあたる幕府重臣・保科正之(秀忠の4男)が、「戦国の世の象徴である天守閣は時代遅れであり、眺望を楽しむだけの天守に莫大な財を費やすより、城下の復興を優先させるべきである」との提言で以後再建されることはなかったのです。

現在の天守台

北桔橋御門

現在の北桔橋御門

江戸末期の北桔橋御門

北桔橋御門（きたはねばしごもん）は、江戸城本丸から代官町通りを隔てて北の丸に面しています。この門は太田道灌の築城時には正門であったと伝えられており、江戸城の天守閣と大奥から直接外部に通じる門で、極めて重要な位置にあることから、江戸城の石垣のなかで最も濠を深くして石垣は高く堅固で雄大な壮観に仕上げています。また、いざという時に木橋を滑車を使い跳ね上げて交通を遮断し、敵の侵入を防ぐ目的がありました。現在も高麗門上部に吊り金具が残っていますが、橋が木橋から土橋に変わっており、跳ね上げることは出来ません。

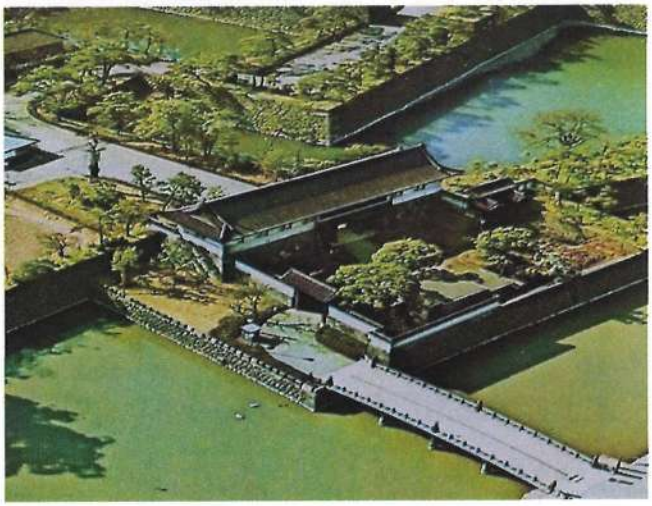
濠も、周辺の石垣は水面から約21メートルの高さで、大阪城の30メートルや伊賀上野城の26メートルなどに次ぐものです。

門に向かって左側には、五十三間多門櫓と呼ばれた長い櫓がありました。石橋はところどころ直角に折れる「屏風折れ」でつながり、リズムよく織り込まれた印影が美しい。造成仕事に携わった大名家の紋が刻まれた石を見つけるのが楽しみです。

弓のように反った石垣の鋭い稜線を眺めると、江戸時代初期、聳え立つ天守の北側を守ったこの門の往年の雄姿が目に浮かびます。

平川御門

現在の平川御門



明治初めの平川御門

平川御門は、旧平川の流路と下平川村があったことで名付けられた「江戸城三の丸の正門」です。御三卿（田安・清水・一ツ橋家）の登城口であり、江戸城大奥の通用門から御局御門とも別名で呼ばれていました。また、江戸城の鬼門にあたる「不浄門」とも呼ばれたのは、罪人や遺体をこの門から出したからです。元禄14年（1701年）3月14日に松の大廊下で刃傷におよんだ浅野内匠頭長矩も、この門から出されて芝の一関藩主田村右京太夫の屋敷に向かいました。正徳4年（1714年）歌舞伎役者の生島新五郎ら多数が処罰された事件で、大奥の風紀を乱した首謀者として御年寄の「江島」も、この門から出され信州高遠城で幽閉されました。「不浄門」が平川御門全体を指すのか、枡形内の「帯曲輪門（おびぐるわもん）」を指すのかは今も謎だそうです。帯曲輪門すぐ脇の階段を下りて船で日比谷方面に向かったのか、帯曲輪突き当りの「竹橋」まで行ったのかもわかっていないようです。

幕末に天璋院篤姫が13代家定に嫁した時も、大奥の女中と同様に平川御門から入城。これに対し、皇女和宮内親王は降嫁して14代家茂の正室となる際、清水門に逗留した後、正面の大手御門から入城し玄関から「表」を通って「奥」入り。厳然たる格の差を見せつけたのです。

平川御門は、高麗門・渡櫓門・木橋（橋脚台はコンクリート）と「枡形の城門形式」が昔のまま現存する唯一の門です。また、木橋の欄干に飾られた「擬宝珠」は、江戸城内にあった木橋から集められた貴重なものです。

一ツ橋御門

現在の一ツ橋御門

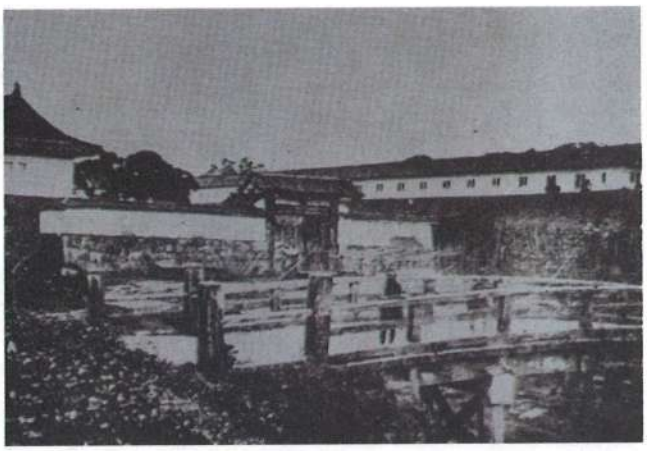
明治初めの一ツ橋御門

一ツ橋御門は、陸奥国または出羽国の大名によって寛永6年に築かれました。古くから丸太1本の橋がこの日本橋川（内濠川）にかかっていたことが名前の由来といいます。

首都高速に覆われた外濠の日本橋川を上ると内濠と接近。一ツ橋を渡った東側に、一ツ橋御門の高麗門脇の石垣が残されています。その正面には内濠の平川御門が見え、手前の丸紅ビル前の道沿いに「一橋徳川家屋敷跡」の標柱があります。八代将軍吉宗次男の宗武（北の丸西・田安御門）、三男宗尹（一ツ橋御門）、9代家重の二男重好（北の丸東・清水御門）の御三卿の家名はそれぞれの見附門名から名付けられたものです。

雉子橋御門

大正１４年に架橋された雉子橋



明治初めの雉子橋御門

雉子橋御門は、陸奥国または出羽国の大名によって寛永6年に築かれました。「雉子橋」の名は、江戸時代初期の1607年（慶長12年）、「回答兼刷還使（かいとうけんさつかんし）」と呼ばれた朝鮮通信使が来朝した折に、馳走用の雉を集めた鳥屋が設けられたことが由来と伝えられています。

現在の雉子橋は、日本橋川を南北に横切っています。その西側、清水濠との間の内堀通り上に、かつての「雉子橋御門」があり、高麗門と櫓門で枡形をつくっていました。現在の雉子橋南詰めに残る「石積み」は、工事で掘り出された石を取り敢えず積んだだけのもののようです。石には刻印や矢穴らしき跡も見えるので、かつては石工が精密に積み上げた石垣の一部だったのでしょう。

築土（つくど）神社

築土神社（つくどじんじゃ）は、東京都千代田区九段にある神社で、通称「築土明神」。創建時の祭神・平将門に因み、武勇長久の神社として親しまれ、千代田区北の丸公園にある「日本武道館の氏神」でもあります。毎年正月に授与される勝守（かちまもり）は有名。

天慶3年（940年）6月、江戸の津久戸村（現：千代田区大手町付近）に平将門の首を祀り、「津久戸明神」として創建されました。室町時代に太田道灌により田安郷（現：千代田区九段坂上）へ移転させられて以降は「田安明神」とも呼ばれ、「日枝神社、神田明神とともに江戸三社の一つ」にも数えられることもありました。

元和2年(1616年)に江戸城外堀の拡張により筑土八幡神社隣地（現：新宿区筑土八幡町）へ移転し、「築土明神」と呼ばれました。

明治7年（1874年）天津彦火瓊々杵尊を主祭神として「築土神社」へ改称。第二次世界大戦の戦災による焼失(1945年)まで300年以上の間、筑土八幡神社と並んで鎮座していたが、戦後、現在地へ移転しました。

田安御門

現在の田安御門

明治初めの田安御門

田安御門は、寛永6年（1629年）に松平伊予守忠昌が築いたと言われています。門内にあった関東の守護神「田安大明神（築土明神）」から名付けられました。高麗門の扉の釣金具に寛永13年の職人の銘「九州豊後住人　御石火矢大工（大砲鋳造者）渡辺石見守康直」と刻まれていて、大修復工事のあったことが推察できます。

築城後、この田安台は北の丸と称し代官屋敷や大奥に使えた女性の隠遁所であり、家康の近親者の千姫、春日局、5代将軍綱吉の生母桂昌院、側室英照院などの屋敷もありました。享保15年（1730年）八代将軍吉宗の第二子宗武は、北の丸西側一帯を所有し田安家を興しました。宗武の七男松平定信はこの屋敷で生まれました。

今や日本武道館のゲートという感が強いのですが、江戸三大火の「明暦の大火」でも焼け残り、現存する江戸城の門では最古です。昭和38年に田安御門の修復が行われ重要文化財に指定されています。

清水御門

現在の清水御門

清水御門は、寛永元年（1624年）備中国足守藩主浅野長晟により建てられ、万治元年（1658年）8月に修復されました。枡形内の濠側に石垣を設けていないのは、左塁上から攻撃するためです。門名はこの辺に清水が湧出していた事に因むということです。

宝暦9年（1759年）九代将軍家重の第二子重好が、北の丸東一帯に屋敷地を拝領して御三卿の清水家を興しました。文久元年（1861年）皇女和宮が降嫁のとき清水屋敷に逗留し、12月11日正午、清水御門を出て本丸に向かいました。道の両側には緋と紺の鍛子の幕を張りめぐらし、白昼ながらも灯を点じた台提燈を一間おきに立て並べ、その中を牛に引かせた御所車で進みました。文久3年（1863年）の本丸炎上時には将軍家茂と正室和子（静寛院宮）はこの清水家に避難しています。昭和36年（1961年）6月7日国指定重要文化財に指定されました。

上からの見晴らしのよさは、江戸城全体から見て裏鬼門筋にあたるこの門が、江戸初期には兵学上北の守りの要衝だったことを思わせます。周囲は高い崖と広い濠に囲まれた自然の要害で、牛ケ淵（うしがふち）と清水濠の境にある長い土橋から高麗門に入ると、縦長の枡形門が城内までの距離を稼いでいます。

石垣には「詰石（つめいし）」が多く、渡り櫓の小庇腕木の微妙なカーブに独特の風格を感じます。渡り櫓をくぐった左に現れる急な「岩岐（石段）」は、江戸城で現存する唯一の貴重な遺構です。

竹橋御門

現在の竹橋

明治初めの竹橋御門

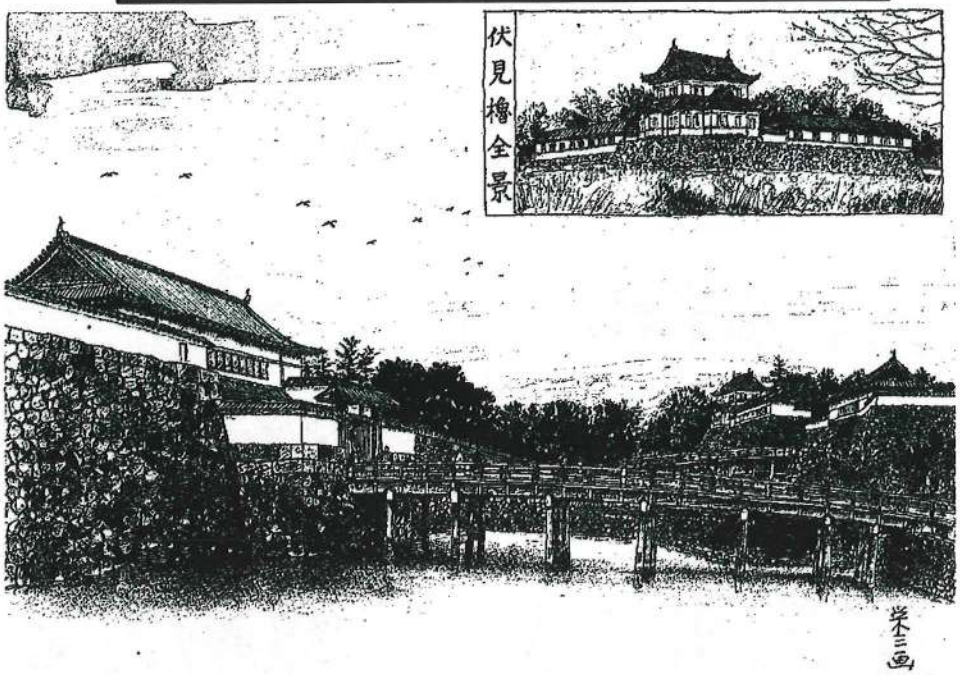
竹橋御門は、竹平町から北の丸代官町に入る清水濠に架けられた橋です。この橋名の起こりは、初期に竹で組んだ簡素な橋に由来します。また竹橋の竹は梅竹の意で、辰ノ口に対する虎ノ門、梅林坂に対する竹橋であるともいいます。元和6年（1620年）に枡形門が造られ、内郭の城門として備えにあたりました。明和5年（1769年）落雷によって火災を起こした記録があるのはこの竹橋御門だけです。

江戸城には「七不思議」といわれる伝説の場所があります。「帯曲輪（おびぐるわ）」がその一つで、竹橋と平川御門を結ぶ、幅約20メートル、長さ約150メートルの細長い堤上の通路のような区画のことです。2代将軍秀忠のころに造られたというこの「帯曲輪」がどんな役割を持っていたのか？諸説あるようです。①両側にある平川濠と清水濠の水量調製施設だった。②江戸時代初期には北からくる外敵を2段構えで迎え撃つ設備「横矢掛（よこやがかり）」だった。③城内の罪人や死体、汚物を平川御門から運び出すための「不浄門」から外部に通じる特殊な経路だった。等、皆さんもぜひ想像を逞しくしてください。

江戸時代にタイムスリップ！

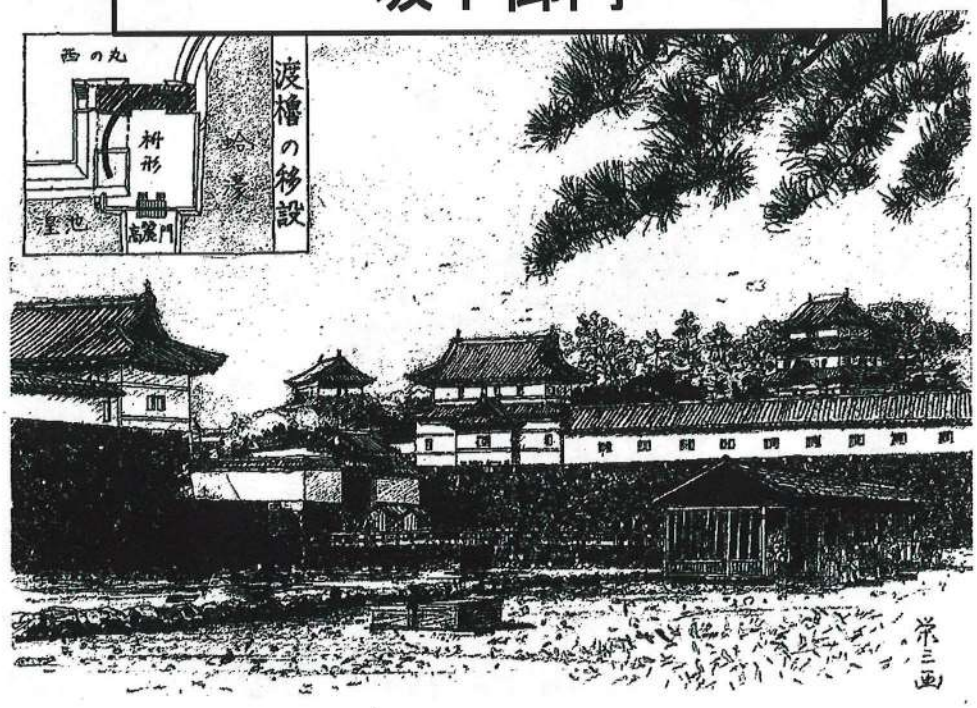
—「木下栄三画伯」のスケッチを見ながら
「現場検証」しましょう！！—

皇居正門（二重橋）



二重橋と呼ばれるわけは

坂下御門

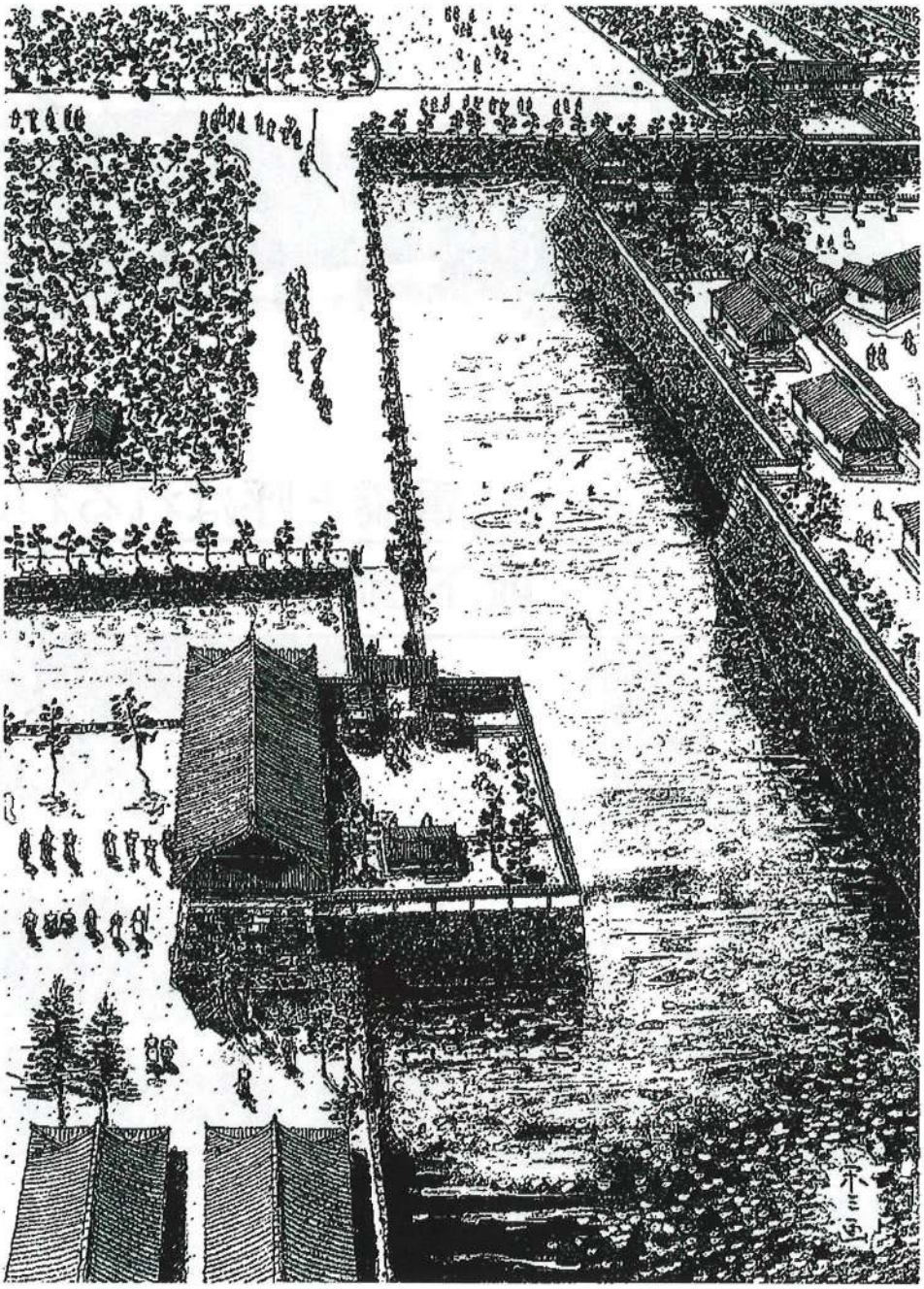


古写真から歴史に思いはせ

①

内桜田御門（桔梗門）

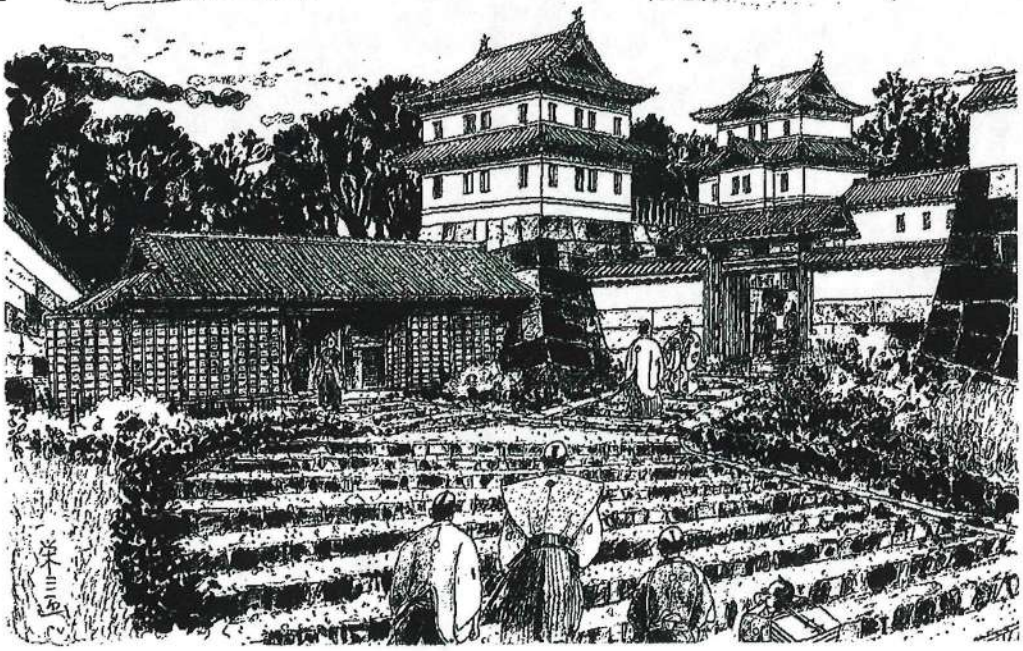
大名や要人も使った要の門



天然の要害その先に本丸が

中之御門

大手三之御門

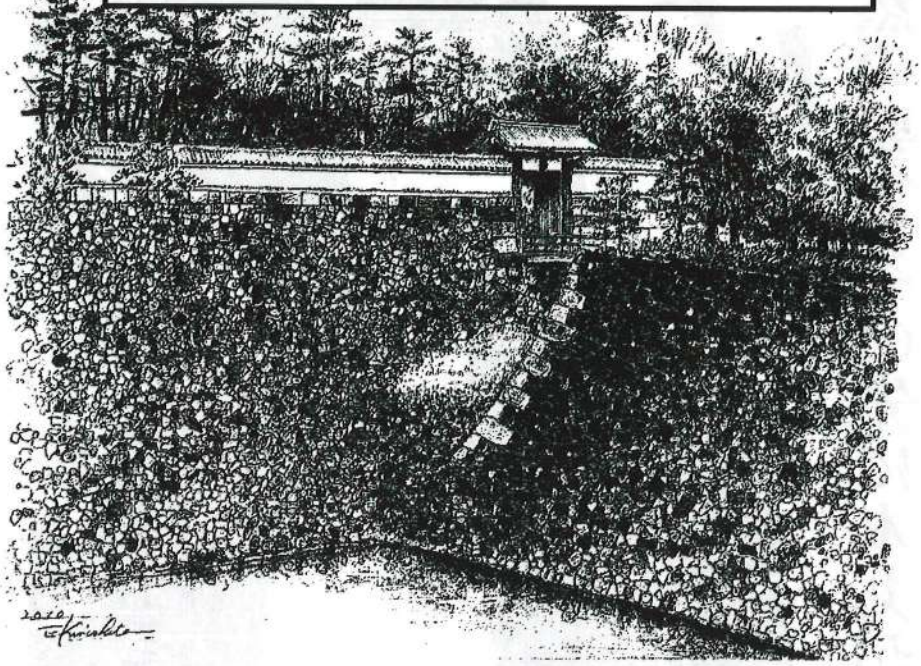


中雀御門

真鍮で飾られた？最深部

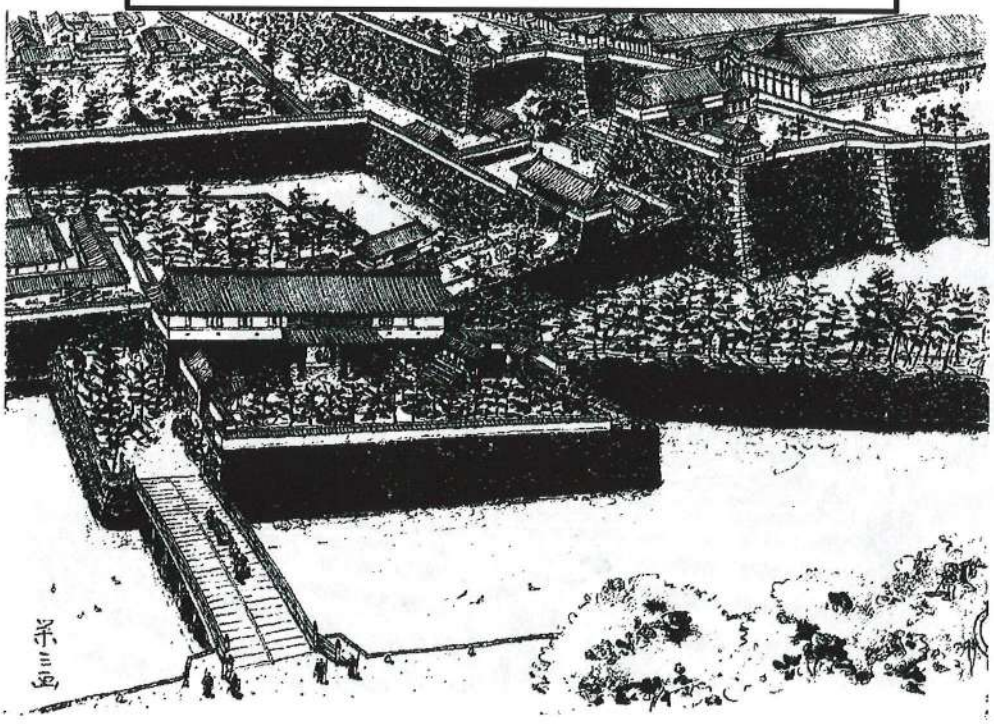
③

北桔橋御門



橋と石垣 天守の北を堅守

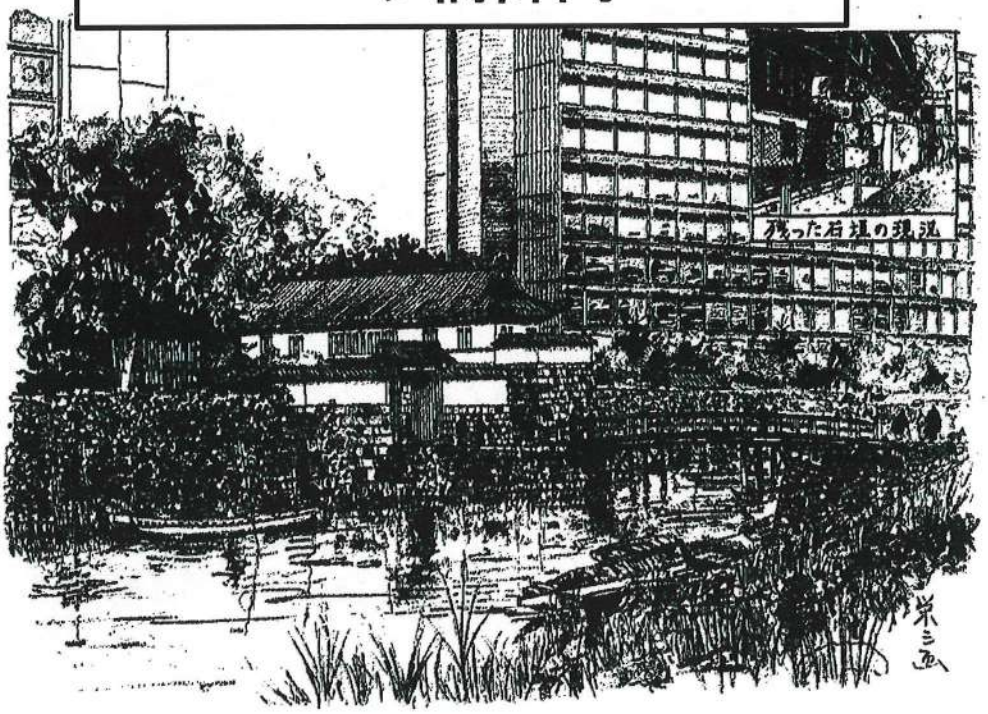
平川御門



「不浄門」大事件の数々くぐる

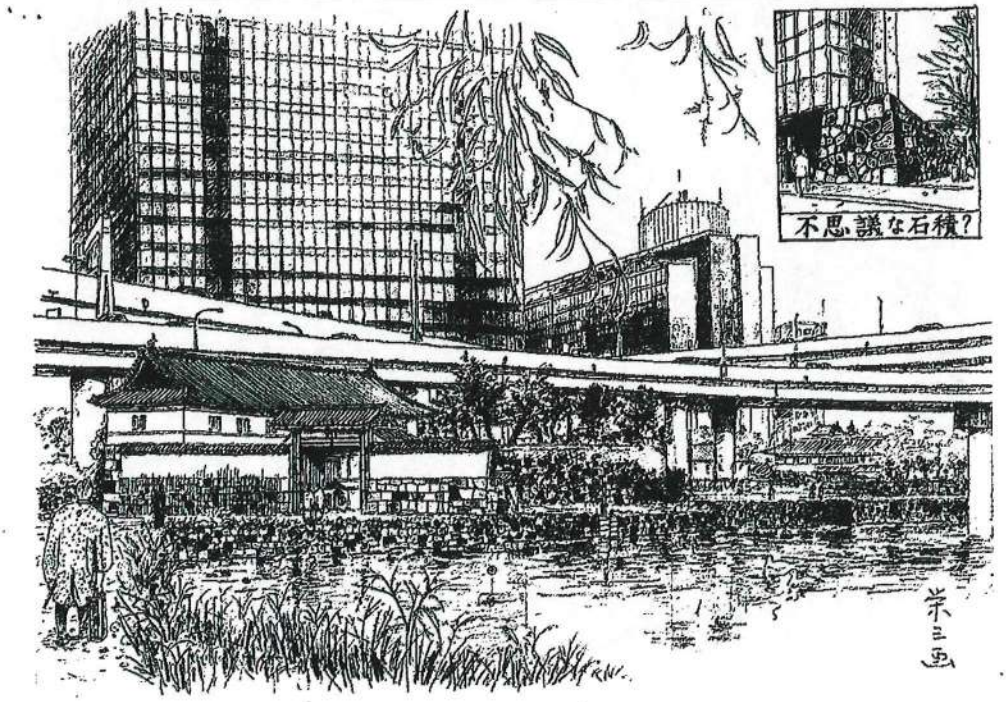
④

一ツ橋御門



遺構、門脇の石垣残るのみ

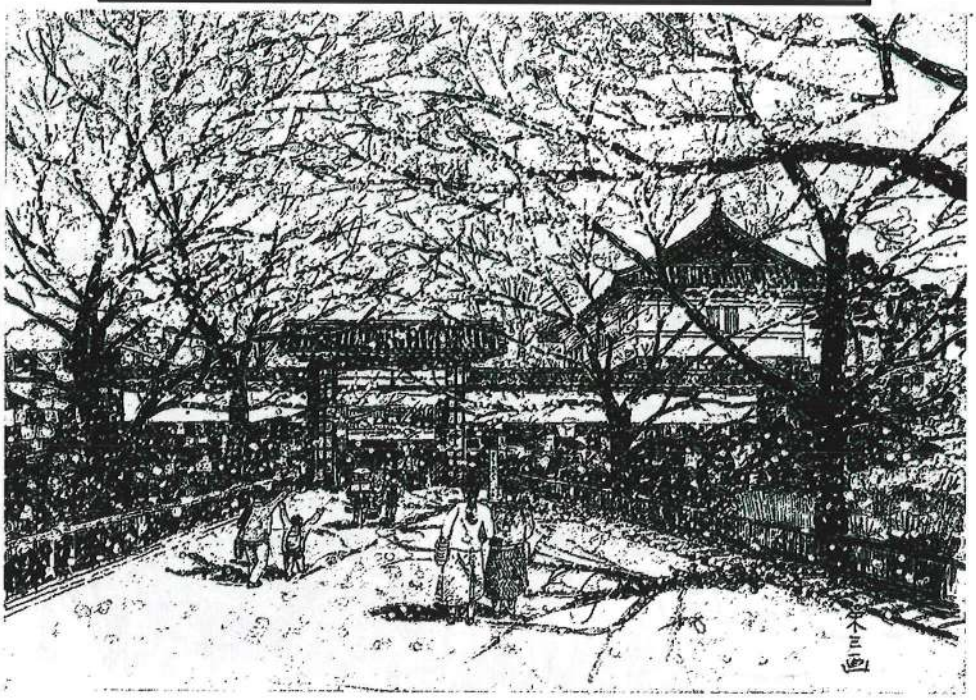
雉子橋御門



「馳走用」のキジに由来

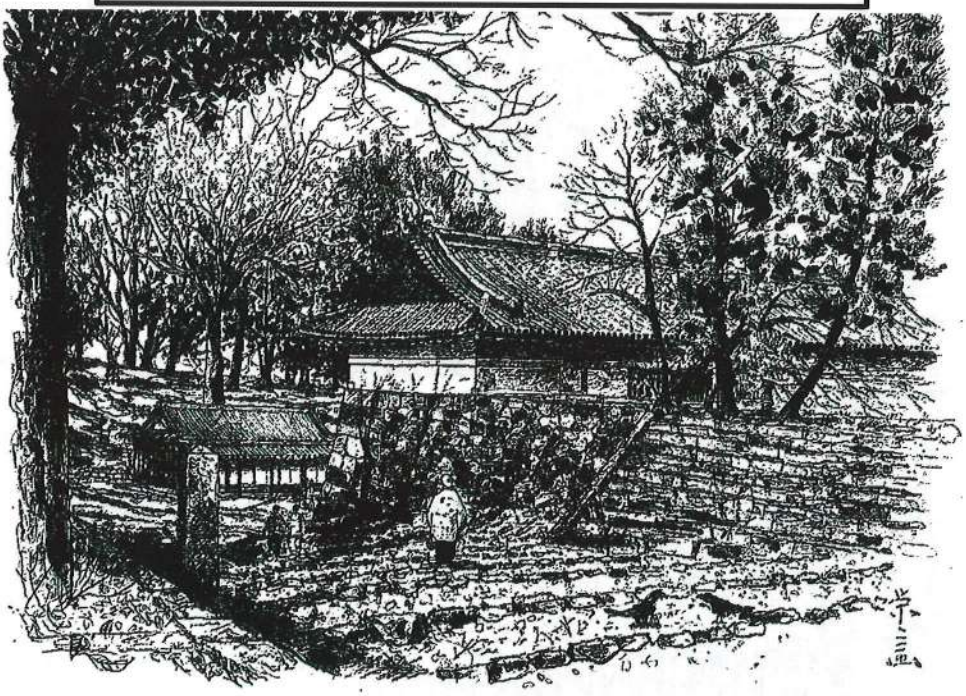
⑤

田安御門



災難を乗り越えた守護神

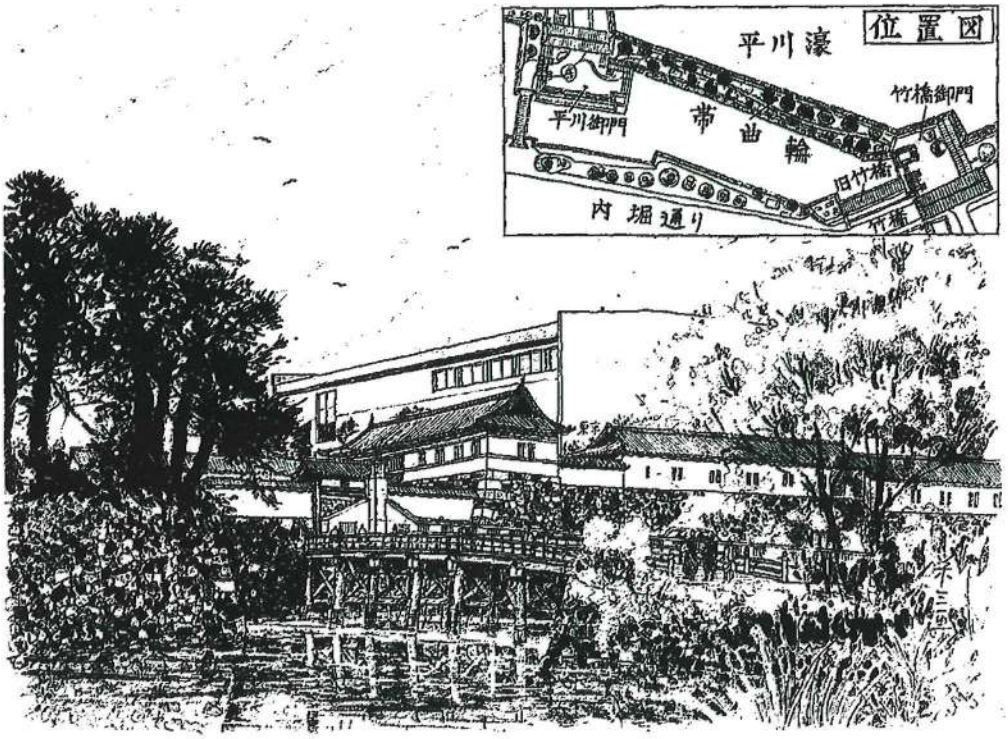
清水御門



四季の通り道 夏は凜々しく

⑥

竹橋御門



門の先に 謎多き「帯曲輪」